

近世後期以降の農家形態の変化について—山口市の釣屋形式を通して—
 福岡教育大 ○河合玲子

目的 山口市における典型的な農家形態は、主屋に付属屋の釣屋と長屋が結合し、西中門や台所中門など突出部をもつものである。この形式は近年改築されるものにも踏襲され、釣屋形式と呼ばれている。しかし、近世以来の基本的な農家形態は主屋と牛屋であり、付属屋や中門はそれ以降の改善によるものである。農家改善の研究は主屋の間取りの変化に主眼が置かれるが、ここでは付属屋に着目してみた。そのことにより、農家における労働・居住機能と農家形態との関係を明らかにする。

方法 主屋の建築年代が大正時代まで溯る農家40戸の間取りの収集と、住まい方や住宅改善の状況について聞き取り調査を行った。また、江戸時代の農家形態については、山口県文書館蔵の『山口宰判本控』、『毛利家文庫』から調べた。

結果 主屋の居住空間は土間に広がり、やがて土間の奥に中門が作られる。農作業の空間は屋外に移り、付属屋を増やしてゆく。住宅改善は空間の拡大のたびに繰り返され、それに対応して他の空間の機能も変化した。このような空間拡大・機能の変化は、主屋に付属屋を結合させる形態を形成したと考えられる。